原文

「屋台」は元禄文化と関連がなく，組織が不適切である。

風神雷神図屏風（俵屋宗達筆，東京国立博物館蔵）
風神の部分

番号53

日光東照宮（栃木県，世界遺産）　豪華な建て物で，桃山文化を受けついでいる。

町人の文化　江戸時代も17世紀の半ばから18世紀のはじめごろ，大阪や京都の上方を中心に商業が発達し，町人が力をもってくると，文化のようすが大きく変わってきた。

大阪の町人井原西鶴は，「日本永代蔵」という小説に，みずからの才能と努力で成功する町人のすがたを，「大商人になった女性」の物語として紹介している。このような小説は，浮世草子とよばれた。人々のあいだでは，歌舞伎や人形浄瑠璃が流行し，近松門左衛門はその脚本に多くの名作を残した。松尾芭蕉は俳諧を芸術に高め，人々に広めた。

京都の俵屋宗達は，装飾画に新しい流れを生み出した。江戸の菱川師宣は，浮世といわれた江戸に見られる町人の風俗を好んでえがいた。浮世絵のはじまりである。浮世絵は，やがて，版画として大量に印刷され，安い値段でたやすく手に入れることができるようになり，多くの人たちに愛好された。これまで公家や大名のためにえがかれることが多かった絵画も，人々の身近なものになった。

このように，**元禄文化**は，町人がそのにない手になったのである。

見返り美人（菱川師宣筆，東京国立博物館蔵）

屋台（復元模型，江戸深川資料館蔵）

修正文

風神雷神図屏風（俵屋宗達筆，建仁寺）

番号53

町人の文化　江戸時代も17世紀の半ばから18世紀のはじめごろ，大阪や京都の上方を中心に商業が発達し，町人が力をもってくると，文化のようすが大きく変わってきた。

大阪の町人井原西鶴は，「日本永代蔵」という小説に，みずからの才能と努力で成功する町人のすがたを，「大商人になった女性」の物語として紹介している。このような小説は，浮世草子とよばれた。人々のあいだでは，歌舞伎や人形浄瑠璃が流行し，近松門左衛門はその脚本に多くの名作を残した。松尾芭蕉は俳諧を芸術に高め，人々に広めた。

京都の俵屋宗達は，装飾画に新しい流れを生み出した。江戸の菱川師宣は，浮世といわれた江戸に見られる町人の風俗を好んでえがいた。浮世絵のはじまりである。浮世絵は，やがて，版画として大量に印刷され，安い値段でたやすく手に入れることができるようになり，多くの人たちに愛好された。これまで公家や大名のためにえがかれることが多かった絵画も，人々の身近なものになった。

このように，**元禄文化**は，町人がそのにない手になったのである。

見返り美人（菱川師宣筆，東京国立博物館蔵）

日光東照宮（栃木県，世界遺産）　豪華な建て物で，桃山文化を受けついでいる。

原文

意見番号54に関連した修正（当該箇所に写真を配置するため割付を変更します。）

「神奈川沖波裏」（葛飾北斎筆，東京国立博物館蔵）さまざまな富士のすがたをとらえた46枚の画集，「富嶽三十六景」の一つ。

江戸の出版元（西本願寺蔵，早稲田大学図書館蔵）　十返舎一九や滝沢馬琴を生んだ蔦屋の店先。

庶民の文化　18世紀の末から，19世紀のはじめの文化・文政のころになると，文化の中心は上方から江戸に移り，地方にも広まって，町人や農民の多くが文化をたしなんだ。これを**化政文化**という。

社会の不安を反映して，元禄文化のような清新さはなくなり，こっけいや皮肉が喜ばれるようになり，政治や世相を風刺した狂歌や川柳が流行した。小説も，さまざまなものが読まれた。

浮世絵も，美しい版画として大量につくられ，錦絵として広く売り出された。鈴木春信や喜多川歌麿は美人画，葛飾北斎や歌川広重は風景画の画家として，それぞれ特色を発揮した。浮世絵は，ゴッホやモネなどの画家を魅了した。

人々は，芝居小屋や寄席に出かけ，歌舞伎や落語を楽しむようになった。祭礼などのときに舞台をつくり，芝居を演じた村もあった。神社や寺院の縁日や，盆の行事などの年中行事も楽しみの一つとなり，講をつくって，伊勢神宮や富士山へお参りすることもさかんになった。庶民の中には，読み・書き・そろばんを身につけ，俳諧をたしなむ人もいた。与謝蕪村や小林一茶などは，そうした人々に支えられていた。

寺子屋のようす（渡辺崋山筆「一掃百態」，愛知県田原町教育委員会蔵）

①十返舎一九の「東海道中膝栗毛」や滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」が読まれた。流行の背景には，木版印刷技術が進んで出版が容易になったこと，貸本屋がふえたこともある。

修正文

「神奈川沖波裏」（葛飾北斎筆，東京国立博物館蔵）さまざまな富士のすがたをとらえた46枚の画集，「富嶽三十六景」の一つ。

寺子屋のようす（渡辺崋山筆「一掃百態」，愛知県田原町教育委員会蔵）

庶民の文化　18世紀の末から，19世紀のはじめの文化・文政のころになると，文化の中心は上方から江戸に移り，地方にも広まって，町人や農民の多くが文化をたしなんだ。これを**化政文化**という。

社会の不安を反映して，元禄文化のような清新さはなくなり，こっけいや皮肉が喜ばれるようになり，政治や世相を風刺した狂歌や川柳が流行した。小説も，さまざまなものが読まれた。

浮世絵も，美しい版画として大量につくられ，錦絵として広く売り出された。鈴木春信や喜多川歌麿は美人画，葛飾北斎や歌川広重は風景画の画家として，それぞれ特色を発揮した。浮世絵は，ゴッホやモネなどの画家を魅了した。

人々は，芝居小屋や寄席に出かけ，歌舞伎や落語を楽しむようになった。祭礼などのときに舞台をつくり，芝居を演じた村もあった。神社や寺院の縁日や，盆の行事などの年中行事も楽しみの一つとなり，講をつくって，伊勢神宮や富士山へお参りすることもさかんになった。庶民の中には，読み・書き・そろばんを身につけ，俳諧をたしなむ人もいた。与謝蕪村や小林一茶などは，そうした人々に支えられていた。

①十返舎一九の「東海道中膝栗毛」や滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」が読まれた。流行の背景には，木版印刷技術が進んで出版が容易になったこと，貸本屋がふえたこともある。

屋台（復元模型，江東区深川江戸資料館蔵）